

二〇二四年四月二六日

藤棚に日の斑こぼるる亭午かな  
友の名を教へてくれる一年生  
花筏早瀬の波に呑まれけり  
存間のごと玄室へ花の風  
新しき靴の軽さよ春堤  
蜘蛛孤独網の破れも繕はず

澄子  
なつき  
澄子  
明日香  
風民  
せいじ

二〇二四年四月二五日

よべの雨晴れて眩しき柿若葉  
青芝にダイヤ散らしに雨上がる  
病みし眼を癒やすがごとき若楓  
藤房を頭突きやまずよ虻の群  
たたなづく山のごとくに春の雲  
卯の花の籬に憩ふ乳母車  
咲き満ちて藤棚千客万来す

むべ  
むべ  
あひる  
康子  
きよえ  
澄子  
澄子

二〇二四年四月二四日

連鎖して双子の欠伸春の昼  
三線に手の踊りだす花筵  
病癒へたんぽぽの絮吹く子かな

もとこ  
あひる  
むべ

二〇二四年四月二三日

百千鳥こぼるる楠の大樹かな  
ポキと折る松葉独活より水溢る  
蒲公英の絮を飛ばして鳩翔てり

満天  
風民  
康子

二〇二四年四月二二日

鯉のぼり風のうましと太りけり  
折り皺に泳ぎにくさう鯉のぼり  
白蝶の日に遊びをる畑昼餉  
山椒の葉平手打ちして若竹煮  
苺食ぶ犬もお手して欲しがりぬ  
あめんぼの水輪池面に溢れをり

あひる  
かえる  
風民  
むべ  
かえる  
きよえ

二〇二四年四月二一日

至福なる葉擦れの音や若葉風  
桜茶のひらく花卉に寛ぎぬ

せいじ  
千鶴

二〇二四年四月二〇日

疎に離れまた密となる花筏  
合唱の音合はせめく初蛙  
中空に淡しと思ふ花水木  
藤棚の下に人垣将棋盤  
鯉のぼり揚げて朝市浜日和  
まくなぎを払えば脚の覚束な  
一水へ翳すなぞへの若楓

かえる  
むべ  
澄子  
こすもす  
なつき  
たか子  
康子

毎日句会みのる選・二〇二四年五月二日